連載バックナンバーはこちら

子育て・教育　2018.06.21

目黒虐待死　再発防止のため、私たち親にできること

【児童虐待ひとごとじゃない（2）】23区内では1人のケースワーカーが100件超の児童虐待ケースを抱えている

今年3月、東京都目黒区で船戸結愛（ゆあ）ちゃんが亡くなりました。両親に虐待された末の死とみられています。義理の父親に続き実母も逮捕されており、結愛ちゃんが朝4時に起きてひらがなを勉強させられていたことや、モデルのような体型を保つために食事を満足に与えられていなかった事実が明らかになっています。

結愛ちゃんは今年1月に香川県から東京都目黒区に転居してきたそうです。虐待は香川県に住んでいたころから起きており、児童相談所（以下、児相）に保護されたこともありました。結愛ちゃんが両親にあてて書いたとされる手紙の悲しい内容が、警察により公開されたこともあり、子育て中の親はこの事件が気になっているでしょう。

どうしたら、このような事件を防げるのか。働く親にできることは――。都内の自治体で、管理職として児童福祉行政に携わった経験を持つ、日本大学准教授の鈴木秀洋さんを、日経DUAL連載でもおなじみの治部れんげさんがインタビューしました。

結愛ちゃんの件同様、命に関わる、ひどいケースは実際にはたくさんある

治部（以下、――）　鈴木さんは都内自治体の児童虐待のケースを扱う部署で管理職を務めた後、研究者に転身しました。行政組織のマネジメントのみならず、実際に数多くの要保護・要支援家庭を訪問した経験をお持ちです。結愛ちゃんの事件は、やはり、ひどい虐待のケースなのでしょうか。

鈴木さん（以下、敬称略）　私にとっても大変つらい出来事です。**しかし、結愛ちゃんの事件は、決して特異なケースではありません。**今回はお子さんが亡くなったことに加え、お子さん自身が両親に書いた手紙が公開されたために、世間から注目を集めています。

しかし、亡くなる前に保護されたため報道されないだけで、結愛ちゃんの件と同じように命に関わる、ひどいケースは実際にはたくさんあります。今回はその氷山の一角がたまたま可視化されたにすぎません。児童福祉行政に携わる人、児童虐待の現場を知る人はおそらく、同じ意見だと思います。

――　そうなのですか…。私を含め、亡くなった結愛ちゃんと同じ年頃のお子さんを持つ親は「どうしてこんなひどいことができるのか。信じられない」と思っているのではないでしょうか。

鈴木　これまでの捜査で明らかになった事実から考えると、逮捕された父親は、「小学校入学前にひらがなを書けるようにしなければ」とか、「子どもが太ってはいけない」といったようなプレッシャーを感じていたのではないでしょうか。また、妻に野菜をたくさん使った料理を作れとか、おやつを手作りしろという指示もしていたようです。

父親について「無職」、「義理」など分かりやすい原因を強調して報道されることに強い違和感を持ちます。いわゆる「ちゃんとした親」になろうとして同じような虐待に走ることは、決して珍しくありません。子どもに高い期待をかけ、母親にその責任を押し付けて、虐待に向かっていく。**この構図は、高所得層・高学歴層か否か、実の親か否かにかかわらず当てはまります。**

都内の自治体で、管理職として児童福祉行政に携わった経験を持つ、日本大学准教授の鈴木秀洋さん

連載バックナンバーはこちら

子育て・教育　2018.06.21

目黒虐待死　再発防止のため、私たち親にできること

【児童虐待ひとごとじゃない（2）】23区内では1人のケースワーカーが100件超の児童虐待ケースを抱えている

虐待の根本原因は、社会のプレッシャー

―― 虐待の根本原因は、親自身の経済状態や属性ではなく、社会のプレッシャーということでしょうか。なぜ、そんな風に追い込まれていくのでしょうか。いくらプレッシャーを感じても、子どもを虐待する心理を理解するのは難しいです。

鈴木　児童福祉行政の仕事は、虐待の通告を受けて家庭訪問し、支援や介入を開始するという事後的な対応だけではありません。**悩みを一緒に考えていくことや福祉的・経済的・教育的・保健医療的な関わりを持っていく、またはそういう支援をつないでいき、虐待に至らないように個々の子どもや家庭に必要な支援を継続的に提供していくのも大事な仕事**です。

そのため、私が働いていた自治体では、0～3歳のお子さんに向けた屋内遊び場などを併設した相談室もいくつか設置していました。そこで小さな子どもを持つお母さんたちの話を聞いていると、みんな、ものすごく不安を抱えていることが分かるのです。

―― 確かに、私も子育てを始めたばかりのときは、何も分からず不安でしたが、それは虐待につながるほどのものなのでしょうか。

鈴木　はい。吐き出す場がないと「不安」や「焦り」は大きくなります。自分の子が他の子と比べて発達が遅いのではないか、寝返りやはいはいをなかなか始めないが何か補助しなくてよいのか、夜泣きを何度もするが大丈夫だろうか、おむつを早く外す練習をすべきではないか、人見知りが激しく外に連れ出しにくいが自分に原因があるのだろうか、などなど、**他の子の状態や発達段階を知らないと不安になり、また逆に他の子を見ては不安になる**。そういうことって誰にでもあったのではないでしょうか？

元気に動き回って遊んでいるお子さんを見て「この子は多動ではないか」とか「他の子のおもちゃを取ってしまったり、すぐ他の子に譲ってあげなかったりすることがあるので、そういう場合は強く叱らないとわがままに育ってしまうのではないか」と心配しているお母さんも少なくありません。**相談できる人がいれば何ということはなく解消される悩みでも、一人で悶々とため込んでいると、感情は肥大化して溢れ出てしまいます。**

こうした状況になってしまう背景には、「子どもを立派に育てるのは母親の責任」というジェンダー規範の問題が根強くあり、誰でも簡単に追い込まれてしまう可能性があります。

連載バックナンバーはこちら

子育て・教育　2018.06.21

目黒虐待死　再発防止のため、私たち親にできること

【児童虐待ひとごとじゃない（2）】23区内では1人のケースワーカーが100件超の児童虐待ケースを抱えている

心配なのは、親が自宅にこもって、どこにも現れない子どもたち

――　そう考えてみると、共働き世帯は保育園を利用できるので、恵まれているかもしれません。毎日、連絡帳に成長の様子を記して、先生がそれにコメントしてくれることで「この子は可愛いし元気だし、大丈夫」と思えることは、そういえばたくさんありました。

鈴木　そうなんですよ。保育園にしても、子どもの遊び場にしても、来てくれる方に対しては、行政もサポートしやすいです。どんなお子さんがいるか分かりますから。**ですから心配なのは、親が自宅にこもって、どこにも現れないお子さんです。**亡くなった結愛ちゃんは、まさに、そういうお子さんだったのではないでしょうか。

――　報道によれば、東京に引っ越してきた後、品川の児童相談所が2回、結愛ちゃんの自宅を訪問したそうです。2回とも会えなかったそうですが、児相のスタッフを増やすとか、もう少し、何とかならないものでしょうか。

鈴木　実際に東京23区の実状を見てきた経験に加え、ちょうど今、全国の児相や市区町村の支援拠点の実態を調査しています。**力のある児相の職員を今より倍増しなくては適切なケースワークや介入はできないし、市区町村支援という役割も果たせないのは確かだと思います。**もちろん今回の対応のまずさの検証は必要です。その点はまた別の機会に話せればと思います。

現在23区内での児相や区の子ども家庭支援センターでは、1人のケースワーカーが多くの場合100件超の児童虐待ケースを抱えています。とても無理がある状態です。1人当たりのケース数を半分の50件にしようと考えたら、一つの部署で人員を倍増する必要があります。単純計算しても、予算として、ケースワーカーの年間給与額×人数分の倍の額が確保される必要があるということになるはずです。

児童虐待を本当に減らしたい、子どもの命を本気で救いたい、と考えるなら、一つ大事なことがあります。それは、**専門的な技能を個人やチームが蓄積できるために正規職員を増やす必要がある**、ということです。子どもに関わることは「誰もができること」だと勘違いしている人が多く愕然とします。**子どもや家庭に関わる専門的知見が必要**なのです。虐待が疑われる家庭を見立て、子どもの状況を把握して信頼関係を築き、長期的に支援をするためには、その仕事に携わる人の雇用の安定や保障が必要です。

法制度として、ケース数が増えたら担当の児童福祉司等を一人増やす、という強制的な仕組みが必要だと思っています。そうしないと、担当職員が過労で職場を離れたり、病気になったりしてしまいます。**人手不足は子どもの命に直結する**という認識を、私は持っています。

連載バックナンバーはこちら

子育て・教育　2018.06.21

目黒虐待死　再発防止のため、私たち親にできること

【児童虐待ひとごとじゃない（2）】23区内では1人のケースワーカーが100件超の児童虐待ケースを抱えている

自分の子、地域の子、みんな一緒に“あほな遊び”をさせてあげたい

最後に、日経DUAL読者に何かできることがあれば、教えてください。

鈴木　**今回の事件を「遠いところでひどい人が起こしたこと」――、つまり他人事だと思わないでください。**

今、多くの親は追い立てられています。自分が社会的地位を得ている高学歴な親は自分の子も同じようにと思い、子にプレッシャーをかける。また自分に学歴がなく現在の生活に苦労している親は、「自分の子こそは学歴をつけさせ社会で生き抜いていけるように」と、やはり子にプレッシャーをかけます。

この社会で自立していくためには、就学前から「ひらがな」を習わせ、「算数を」「英語を」と、他の子たちに遅れないようにさせなければと焦る。塾に入れたら入れたで塾のクラスのアップダウンで親が歓喜したり意気消沈したりする。

その結果、受験勝者となり進学校に入り、東大等有名大学に入って結果を出した子やその親を英雄視してメディアがそれをもてはやす。そんな人たちは周囲にいませんか。**実は、皆さん自身の中にもそんな気持ちが存在していませんか？**

結愛ちゃんの保護者と私たちはそんなに遠く離れた場所にいたのでしょうか。**私はたくさんの子や保護者と出会い話してきて、結愛ちゃんの保護者を責める気持ちよりも、社会のシステムと私たち一人ひとりの意識を変えることに目が向いています。**

子どもの権利・主体性を真の意味で尊重し、子どもが生きているだけで本当に「ありがたい」ことだと思って、子どもと接している人は果たしてどれくらいいるのでしょうか？　支配したい気持ちに気付いたら、結愛ちゃんを思い出して、自分が子どもに向かう気持ちを修正していくことができればと思います。

自分の子どもだけでなく他人の子どもも、同じように、安全で安心して、生きられる世の中を作っていきませんか？　結愛ちゃんは遊びを禁じられ、「あそぶってあほみたいだから　やめるからもうぜったいぜったいやらないからね　ぜったいやくそくします」と書きました。

自分の子どもにも、地域の子どもにも、声をかけて、“あほな遊び”を、みんな一緒にさせてあげたい。そう思いませんか？

実は、アンテナを立てれば、目を見開けば、**学習支援や食事支援が必要な子、安全な居場所がなく睡眠等が十分とれない環境に置かれている子は、あなたの身の回りにたくさんいます。**そこに予算をつぎ込むことは、公正なのだという意識を持ち、その政策に「YES」と言いませんか。そのためには、**「一部、自分たちのための予算を削ってもよいから、今回のような悲しいケースを減らし、なくすために予算を使って」と、皆さんにも声を上げてほしい**と思っています。

治部 れんげ

ジャーナリスト。小学生の息子・娘の母。1997年一橋大学法学部卒業後、日経BP社入社。経済誌の記者を務める。2006~07年ミシガン大学客員研究員としてアメリカの共働き子育て先進事例を調査。14年からフリーに。2018年一橋大学大学院商学研究科修士課程修了。著書に『稼ぐ妻・育てる夫―夫婦の戦略的役割交換』（勁草書房）、『ふたりの子育てルール』（PHP研究所）。現在、東京大学大学院情報学環客員研究員、昭和女子大学現代ビジネス研究所研究員。東京都男女平等参画審議会委員、日本政府主催の「国際女性会議WAW！」アドバイザーズメンバー。一般財団法人女性労働協会評議員。公益財団法人ジョイセフ理事。